

# QOL

No.36

## QOL サポーター 新潟

Quality Of Life



10月29日(水)～11月27日(木)までの約1ヶ月間、独立行政法人国際協力機構(JICA)の要請を受け、フィジー、パナマツ、ソロモンの3ヶ国から計11名の研修員を受け入れ、生活習慣病予防に関する研修を実施しました。

### INDEX

- インタビュー「新潟医療福祉大学で目指す国際人」
- 国際交流のWA! 国際交流活動 実施報告
- 平成26年度「連携総合ゼミ」開催報告
- 学外実習体験記
- 卒業生レポート
- 「第14回新潟医療福祉学会学術集会」開催報告
- CAMPUS NEWS
- 伍桃祭を終えて
- 受験生のみなさんへ



新潟医療福祉大学

2014年12月10日発行  
新潟医療福祉大学広報委員会編集

# 新潟医療福祉大学で目指す国際人

本学では、国際交流活動を研究・教育の両面で充実させ、在学生在がこれからの保健・医療・福祉・スポーツの分野で、豊かな感性と幅広い視野を身に付けられるよう積極的に国際交流を推進しています。

今後、国際交流活動に求められることや「国際人」育成に向けての展望について、国際交流委員長の久保雅義先生にお話を伺いました。



国際交流委員長  
理学療法学科

教授 久保 雅義

■学位：Sc.D./ボストン大学(2003年)

## 国際化が進む社会において、 どのような能力が求められていると思いますか？

「国際化が進む社会」での能力というと、まずコミュニケーションツールとしての「英語」についての能力が表に出ます。そして「世界で…」という謳い文句で始まる華々しい活躍に必要な能力が続きます。これらは「世界で活躍するビジネスマン」のイメージがもとになっていると思います。これに対して、保健医療福祉分野での「国際化」のイメージには、青年海外協力隊・国境なき医師団等の国際貢献あるいは医療ツーリズムなどを除けば、大多数の人がピンと来ないと思います。

実際に「世界で活躍する」のはほんの一部の人にしか起こりません。それよりも「国際化【も】進む社会」の問題に立ち向かえる能力が求められていると思います。病気・貧困・飢えからの解放といった20世紀の問題への対応を延長しても、21世紀の問題、例えば「少子高齢化・労働力減少」などには立ち向かえません。新しい問題には、新しい解答が必要です。そこで鍵になる人材は「セルフスターター(自ら行動を起こせる人)」だと思います。これからは、「セルフスターター」になるための能力が求められていると思います。

## 本学の学生だからこそできる国際交流・ 国際貢献活動はどのようなものがありますか？

発展途上国の都市部から離れた地域では、病院などの保健医療福祉システムが十分に整っておらず、物資も人材もない中で必要に迫られて地域で何とかしていこうと工夫をこらしています。リハビリテーションの領域ではCBR(Community Based Rehabilitation)と呼ばれているもので、地域住民と専門職者たちが一緒になって働いています。

人材もシステムも整っているはずの先進国日本で、最近、「地域でのリハビリテーション」や「地域での保健医療福祉活動」などが注目を集めているのは何か不思議な気持ちもありますが、このモダンバージョンのCBRにもやはり「様々な役割を担う人たちが一緒になって働く」ことが必要になるのはオリジナルバージョンと同じですね。

そういった意味で、本学の教育の特色の一つである「連携」は地域、場所を選ばずますますその重要性を増すばかりであることが分かります。学生のみなさんが、学生のうちに、あるいは専門職者となってからどのような場面で国際交流・国際貢献に関わるかは様々でしょうが、どの場面においても本学で培った「連携を作り上げる力」を存分に発揮してもらいたいと思います。



大学間国際交流の協定を締結しているフィリピンの大学生との交流

## 本学における「国際人」育成に向けての 展望についてお聞かせください。

「国際人」になるには、「超能力」が必要なわけではないと思います。「超能力者」のスプーン曲げは見ていて面白いですが、実際には「曲がったスプーン」は何の役にも立ちませんし、むしろ曲げないでほしいくらいです。そんな役に立たない「超能力」を夢見るよりも、本学の学生には普通の「能力」を伸ばしてもらいたいです。

ここで問題なのは、「学校の成績」と「自分の能力」の区別ができていない、いまだに「私の能力ってなに？」という状態の学生が大勢いることです。「国家試験に受かる」などは、本学の学生の能力のほんの一部にしか過ぎません。「井の中の蛙」で「食わず嫌い」が自然に井戸から出てきて新しいものを口にすることは、今までも起こりませんでしたし、21世紀でも起こりません。「能力」は、発見されなければ開発されません。

国際交流委員会は、国際交流活動や海外研修の機会を増やすことに注力していますが、これらの機会を「能力発見」を助ける手段として考えると、「そこに参加してみよう」と学生が踏み出した段階でその目的の70%は達成されていると思います。「踏み出せる自分」がまさに「セルフスターター」であり、私が本学で多く目にしたい学生です。社会は我々個人の意図や努力とは無関係に「国際化」していきます。その社会の中で自分の能力を発揮する人は、自然に「国際人」になります。「急がばまわれ」です。



国内の中古車いすを回収・修理・整備し、発展途上国や被災地に届ける「空飛ぶ車いすサークル」

どんどん広がる international exchange ✈

# 国際交流のWA!

これからの保健・医療・福祉・スポーツの分野で、豊かな感性と幅広い視野を身に付けることを目的に、開学以来、積極的に国際交流を進めてきました。その国際交流の一部をご紹介します。

## JICA 研修 実施報告

平成26年10月29日(水)～平成26年11月27日(木)に渡り、独立行政法人国際協力機構(JICA)の要請を受け、フィジー共和国、バヌアツ共和国、ソロモン諸島の3か国から計11名の研修員を受け入れ、生活習慣病予防に関する研修を実施しました。

本学は、看護・医療・リハビリ・栄養・スポーツ・福祉の総合大学として、生活習慣病予防に不可欠な、看護、栄養管理、運動指導、リハビリテーションのすべてに関する教育・研究を実施していることから、大学として日本で唯一、研修実施機関として選定され、5年前よりJICA受託事業として研修員の受け入れおよび学内外での研修を行っています。その研修プログラムの一部をご紹介します。

pick up!

### 〈JICA 研修プログラム紹介〉

#### 地域住民を対象とした運動教室

健康スポーツ学科 講師 佐藤 大輔

生活習慣病予防を含め、健康寿命延伸のための運動プログラムを学ぶことを目的に、本学で実施されている「イキイキ運動教室」に参加し、ウォーキングやトレーニングマシンを使ったエクササイズを体験しました。

研修員は、地域の方々や本学学生と一緒に有酸素運動のウォーキングと無酸素運動の筋力トレーニングを楽しんでいました。その後、プールでの運動教室を見学し、自国では目にする事の少ないアクアエクササイズに興味を示していました。

運動を通して、研修員同士だけではなく、地域の方々や本学学生との交流を深める良い機会になりました。講義では見られない笑顔も見られ、体を動かすことの重要性を再認識する時間になったと感じています。



#### 栄養教育の方法

健康栄養学科 講師 岩森 大

自分にとって適した食事の分量とバランスを理解するための学習方法を習得し、栄養教育を行う上での教材作成に向け、基本的スキルを身に付けることを目的としました。

実習では、研修員たちがお国料理を作り、出来上がった料理は、バイキング形式で「食べたいだけ選択」します。その後、食べた量をチェックし、「自分にとって必要な食事量」と比較します。過不足を考えるに当たり、「目分量」「食材ごとの使用重量」「料理ごとのカロリー量」など、様々な角度から検証することで、一食当たりの適量をバランスよく示す手法を理解できました。

研修員は、自国の料理を本学学生と共に「作り」「食べた」ことで、交流を深めることもでき、とても喜んでくれました。



今年度のJICA研修では、上記以外にも学内での各種研修プログラムのほか、新潟県庁や新潟市役所への表敬訪問、病院見学、日本文化体験、青年海外協力隊OBとの交流会など、様々なプログラムを実施しました。研修終了後は、研修で学んだ成果を各国の関係者に普及する予定となっています。

## 短期海外研修 実施報告

国際交流委員会では、学年・学科に関係なく誰でも参加できる短期海外研修を企画しています。実施時期は、夏休みあるいは春休みの10日間程度で、過去にはフィリピン、フィジー、タイなどを訪れました。

pick up!

### タイ研修

8月14日(木)から8月22日(金)に行われたタイ研修をご紹介します。

この研修の目的は、1)青年海外協力隊の実際の活動現場を訪れること、2)大学や医療機関の見学です。参加者は、マヒドン大学のASEAN HOUSEという日本の援助で作られた施設に宿泊しましたが、一泊2千円以下で宿泊でき、まわりは世界からの留学生だらけでした。

研修では、4名の青年海外協力隊員にそれぞれの働く現場でお会いすることができ、その内の一人は本学の卒業生でした。また、マヒドン大学の教員の引率で訪問リハビリテーションに同行し、壁のない家でトイレもはっきりと区別されていない環境での活動に日本とタイでの環境の違いを目の当たりにしました。

国際交流委員会企画の海外研修は参加者と一緒につくり上げる研修です。今後の活動にご期待ください。



訪問リハビリテーションに同行



川で泳いでみました

# 連携総合ゼミ開催報告

「連携総合ゼミ」とは、本学の特徴的な取り組みの一つである「連携教育」の一環として、4年次前期に開講されるゼミで、これまで学内外で修得した専門知識・技術を総動員し、「チーム医療」を実践的に学んでいきます。

ゼミでは、具体的な症例をもとに、関連する学科が混成チームを形成。グループワークを通じて対象者のQOL向上に向けた支援策を意見交換し、検討結果を発表します。

本年度の「連携総合ゼミ」では、新潟大学、新潟薬科大学、日本歯科大学新潟短期大学、フィリピンのアンヘレス大学、サントトーマス大学の学生がチームの一員として加わり、国際的な視野が広がるなど、さらに「チーム医療」の学びの幅が広がりました。

連携総合ゼミの流れ

①自己学習を行い自身が担当する専門職を理解

②自己学習の成果をグループ内で発表し他の専門職を理解

③各専門職の立場から意見を出し合い支援策を共有

④協働して最善となる具体的な支援プランを作成

⑤パワーポイントを使用して研究成果をグループ発表

Report.1

開発途上国における村のヘルスケアと障害のある人たちへのリハビリテーション 理学療法学科 准教授 古西 勇

## ■フィリピンの地域に根ざした連携

私たちのゼミでは、実際にフィリピンの学生を招き、フィリピンの地方に住む障害のある人に焦点を当てた事例について話し合い、地域社会に根ざした保健・医療・福祉・スポーツのあり方を検討してまいりました。今年は、本学と大学間協定で交流のあるアンヘレス大学とサントトーマス大学の2大学から総勢7名のフィリピンの学生を迎え、本学の学生を交えた10数名程度を2グループつくりゼミ活動を行いました。

障害のある人は、存在そのものが否定的な意味合いを持つ「問題」ではありません。むしろ、地域社会の一員として貴重な存在と言えます。話し合いの事例として取り上げたのは、実在する10歳の女の子と55歳の女性の2人についてです。10歳の女の子は脳性麻痺があり、歩くことができません。また、55歳の女性は脳卒中により身体の右半分を動かすことが困難で、杖を使って何とか歩くことができますが、右手が不自由な状態です。5日間続くゼミ活動では、多職種間での連携を視野に入れて、彼女らに提供できるサービス内容を検討してい

きました。

フィリピンでは保健・医療・福祉・スポーツ分野の専門家の養成がまだ充分でなく、養成されていたとしても、地方では雇用先がほとんどないというのが実情です。したがって、フィリピンで多職種間で連携する機会はまだ少なく、今回のゼミ活動はフィリピンの学生たちにとって貴重な経験となったようです。

また、発表会でのプレゼンテーションを含め、ゼミ活動の言語は全て英語を用いました。本学の学生たちは、最初は「英語は苦手」と不安がっていましたが、フレンドリーなフィリピンの学生の国民性や年齢も近いおかげですぐに友達になっていました。フィリピンの学生たちも、発表の一部を日本語で行うことを目標に、日本の学生から日本語を教わり発表会に臨みました。

発表会は、グループごとに、メンバー全員で話し手を交代しながら、英語と(フィリピンの学生の)日本語を交えて、見事にやり遂げました。ただでさえ緊張する発表を、英語で行ったということは、学生たちにとって大きな自信につながったと考えます。



▶英語で患者様の治療についての話し合い



▶連携総合ゼミ発表会当日



▶学長より修了証授与

## 参加学生からの感想・コメント



私が学んだ一番大切なことは、リハビリテーションにおける連携と協働についてです。私たちが目を向けなければならないところは、患者様のクオリティ・オブ・ライフ(QOL)であることを学びました。(アンヘレス大学 理学療法学科 Jansenn Ray D. David)



自分の学んでいる義肢装具について英語で説明するのはなかなか難しかったですが、どうすれば伝わるのかを試行錯誤した時間も含めて貴重な経験ができました。今後も、より多くの学科の学生が参加してくれることを期待します。(義肢装具自立支援学科 工藤 彩久耶)



医療に対する考え方や制度が異なると、優先順位も異なることを学びました。日本の医療では、他専門職との協調性が求められます。連携総合ゼミでは、チームアプローチに必要とされることをより強く学べると 생각합니다。(言語聴覚学科 武淵 絢子)



英語と日本語を同時に使うことは大変でしたが、とても楽しくゼミに参加できました。異なる文化や制度の中でも、患者様のおかれた状況に対応する柔軟性を身につけることができたと感じます。(看護学科 本間 早耶香)

## ■他大学、多職種間で知恵を結集させた 地域生活支援

私たちのゼミでは、高齢者の入院中から退院後の支援計画をディスカッションしました。参加学生は、本学から「理学療法学科」、「義肢装具自立支援学科」、「臨床技術学科」、「健康栄養学科」、「看護学科」、「社会福祉学科」の8名の参加と「新潟薬科大学」、「新潟歯科大学歯科衛生学科」より1名ずつの参加による合計10名で構成されたメンバーで事例を展開しました。

8月、初回の顔合わせから、まずは事例における問題と解決方法を自分なりに考えてみよう話し、9月の連携総合ゼミに臨みました。ゼミ初日では、自己紹介を兼ねてそれぞれの立場から考えてきた問題と課題解決のための手段を発表し合いました。開始当初、メンバーの発言はごちなく、事例の全体像もつかめない状態でした。そこで、モジュールのスライドをスクリーンに写し、全員で同じ画面を見て事例の一つひとつの情報を整理・理解することから始めました。全員が事例の情報を共有してからは、様子を見ている私たちもわくわくするような

ディスカッションが繰り広げられ、自然とメンバー同士打ち解け合いゼミを進めていくことができました。対象者の健康を支えるため、身体面はもちろん、生活背景、環境や家族、近所の人との交流など、地域資源を含めた社会背景も踏まえた話し合いがなされました。

その中でも私が感心したことは、事例の問題点だけでなく、「この人ならどの程度できるだろうか」、「この環境であればどのような支援が受けられるだろうか」といった、対象者のこれまで培ってきた生活能力、対人交流を評価し地域に根差した具体的な支援計画を立案したことです。また、介護保険で利用可能なサービス計画や環境整備に必要な住宅改修やレンタル機器、自己負担金額も検討しました。

今回のゼミでの取り組みにより、多職種が顔を合わせ、情報や問題を共有することからスタートし、対象者の幸せというゴールを目指し知恵を寄せ合い、専門職の強みを活かしつつ、専門外の知識を興味を持って聞く姿勢は、多職種連携そのものだと感じました。事例の限られた情報の中から想像を膨らませ、活発な意見交換ができたグループ活動に将来を期待します。頼もしいゼミの1週間でした。



▶ゼミ活動の様子



▶発表会当日の様子



▶ゼミメンバーとの集合写真

### 参加学生からの感想・コメント



ゼミを通して、一人の患者様にこれだけ多くの職種が関わることで、患者様のQOLを高められることを学ばせてもらいました。ゼミは、お互いを尊敬し合う雰囲気だったので仲間意識も高まり、とても有意義な時間が過ごせました。(理学療法学科 雲野 遥)



ゼミでは、他の職種との関わり方や業務内容等について理解を深めることができました。また、共に話し合うことで職種間での情報共有の難しさや連携の大切さを学ぶことができ、今回学んだことを将来に繋げたいと思います。(義肢装具自立支援学科 小林 慧)



多職種で事例検討を行ったことで、自分の職種の意見は自分で考えて伝えなければならないという責任感と使命感がありました。学生時代にこのような経験ができ、将来に活かすことができる貴重な経験になりました。(健康栄養学科 皆川 智代)



対象者だけでなく、その家族の望みも叶えることができるような方法を考えることが難しかったです。他の専門職の仕事内容を知っておくことが、チーム医療では重要だと感じました。充実した1週間でした。(臨床技術学科 松木 啓人)

## 平成26年度 連携総合ゼミ事例一覧

- 脳性まひ(疑い)児と育児不安をもつ母親への成長・発達支援
- 児童虐待(ネグレクト)に伴う精神発達遅滞児への成長・発達支援
- 筋萎縮性側索硬化症(ALS)ケースの在宅療養実現への支援
- 私も町のような人になりたい(精神科領域)
- 大阪市における小学生虐待死事例の検証
- 切迫早産・妊娠高血圧症候群で入院が必要になった妊婦への援助
- 開発途上国における村のヘルスケアと障害のある人たちへのリハビリテーション
- 高齢者糖尿病合併症の支援策
- 発達障害児の特別支援教育における外部専門家との協力
- 重度四肢まひ者の家庭復帰計画
- 高齢者の骨折予防支援策～退院一週間後の生活への介入～



# 学外実習体験記

## 理想の理学療法士を目指す！

理学療法学科 3年 菅 博貴



私は、9月22日(月)から10月11日(土)までの約3週間、評価実習に行かせていただきました。評価実習では、患者様を実際に評価し、問題点を抽出することから治療プログラムの立案まで行いました。普段の大学生活では学ぶことができない貴重な体験ができたと共に、評価における知識や技術の不足など課題も多く見つかった実習でした。

一番印象に残ったことは、担当してくださった先生の患者様との接し方です。患者様に接するときの笑顔や言葉遣い、リハビリに消極的な患者様に対してのやる気を起こしてもらおうための対応など学ぶところが多くありました。いつか私も担当してくださった先生のような理学療法士になりたいと思うようになりました。

今回の実習を通して、自分に不足しているところに気づくことができたので、これから知識・技術の修得はもちろんのこと、今回学んだ患者様との接し方を将来に活かしていきたいです。

## 笑顔に繋がる作業療法士に

作業療法学科 4年 根本 佳菜子



私は、4年生の前期に和歌山県の紀和病院で8週間実習をさせていただきました。

実習では、作業療法場面の見学や作業療法士の先生方との関わりを通して、患者様の性格や生活歴、趣味嗜好など、それぞれの患者様らしさのある生活をベースにアプローチするという考え方を学ぶことができました。また、患者様と関わる中で、病気により不自由になった生活動作を少しずつ再獲得することで、患者様の表情が徐々に明るくなるという心理的な変化を間近で体験し、大学での勉強だけでは味わえない喜びを感じました。

また、退院後に訪問リハビリを利用する患者様について、入院中から訪問リハビリのスタッフに情報を提供することで、退院後の在宅生活がよりスムーズになるとお聞きし、現場のスタッフ同士の連携の重要性を学びました。

今回の実習を通して学んだことや経験したことを活かし、入院中から退院後の生活を考えてリハビリを提供できるように努力し、患者様の笑顔に繋がる作業療法士になれるように頑張りたいです。

## 摂食嚥下訓練を通して学んだこと

言語聴覚学科 3年 岩本 莉穂



私は、新潟市東区にある木戸病院にて3週間評価実習をさせていただき、摂食嚥下障がいの患者様を中心に評価・訓練をさせていただきました。

摂食嚥下機能(食べる機能)は人間が生活する中で最も重要な機能の一つであり、患者様の症状は日々変化するので、日々評価し訓練することを心がけながら取り組みました。食事中むせてしまうため食べ物を飲み込むことができない患者様や、声を掛けないと眠ってしまうために飲み込む



ことが困難な患者様など、様々な症例を目の当たりにし、講義だけでは学ぶことのできない臨床の難しさを経験することができました。

また、言語聴覚士が摂食嚥下機能訓練を行う際には、患者様の情報や禁忌事項を把握しておく必要があり、他の職種との連携の重要性について改めて学ぶことができました。

今回の実習を通して、言語聴覚士の魅力を改めて感じる事ができ、言語聴覚士を志す気持ちがより強くなりました。今回の実習の中で成功した点は伸ばし、失敗した点は改善するなど4年次の総合実習に活かしていきたいです。

## コミュニケーションの大切さ

義肢装具自立支援学科 3年 伊藤 あきみ



私は、台湾の台北榮民總醫院で4週間の実習をさせていただきました。実習では主にインソールと大腿義足チェックソケットの作製を行いました。

今回の実習を通して、コミュニケーションの大切さについて痛感しました。日本での実習とは異なり、多くの患者様には言葉が通じず、身振り手振りだけでは伝えきれないこともたくさんありました。義肢装具の多くは身体に触れるもので、痛みや圧迫感がある場合には処置をしなければいけないのですが、それがどこにあり、どのように直すべきなのかが分かりにくい状況で、いつもより作業に時間がかかりました。コミュニケーションを取ることは、スムーズな作業に繋がるということを学びました。

また、台湾の義肢・装具や制度、リハビリテーションについて間近で見聞きすることができました。日本のみならず、台湾の義肢装具の現状に触れたことで、世界に対する視野が広がったと感じています。今回の実習を通して学んだことを今後の大学生活にも活かしていきたいです。

## 学外実習を通して発見した魅力

臨床技術学科 4年 佐藤 逸平



私は、「臨床検査」、「臨床工学」の二つの部門でそれぞれ4週間ずつ実習をさせていただきました。今回が初の学外実習であり、臨床検査技師、臨床工学技士の業務内容について、より現場で活かせる知識を身につけることができました。同じ院内の異なる部門で実習を行えたことで、職種間の関わりを理解することができました。そして、充分にはイメージできていなかった両職種の知識を活かせる場、つまりダブルライセンスという自分たちの強みを活かすことができる場を発見する貴重な経験となりました。

また、私は以前、主に臨床検査技師としての進路を希望していましたが、今回の実習を通して、少し苦手意識のあった臨床工学部門への関心が高まり、臨床工学技士に進路を変更する決断をしました。このように様々な魅力を感じ、自分の進路について考えることができたのも実習の収穫だと感じていますし、今後の学習への意欲が高まるきっかけとなりました。

本学では今年度、10学科が学外実習を行いました。

各専門職として高い実践力を身につけることを目標とした学外実習の成果を報告します。

## チーム医療の一員として

健康栄養学科 3年 樋口 花穂



病院実習では、栄養科の事務業務や厨房業務だけでなく、NST(栄養サポートチーム)委員会や褥瘡対策委員会、退院前カンファレンス、嚥下造影検査の見学など様々なことを経験させていただきました。

一番印象に残っていることは、チーム医療での管理栄養士の在り方について学んだことです。管理栄養士は、栄養状態の改善を第一に考えますが、患者様や他の職種にとってそれが第一だとは限らないので、チームでのアプローチが必要になります。例えば、食形態を上げたいが寝たきりでADL(日常生活動作)が低い患者様の場合、リハビリによって改善が期待できますが、しっかりと栄養が摂れていないとリハビリで活動量を増やすことができないためすぐには改善できません。

栄養状態の改善だけを優先するのではなく、カルテに目を通し、患者様の様子や背景、多職種のアプローチの仕方を把握したうえで管理栄養士としてのアプローチを考えることがチーム医療の一員として重要だと学びました。

## 教育実習を終えて

健康スポーツ学科 4年 山田 大地



私は3週間、母校の中学校で教育実習をさせていただきましたが、担当クラスの中には、授業や終学活から抜け出し参加しない生徒がいることを聞き、その生徒に対してどのように対応すればよいか不安に感じていました。

実習初日、その生徒は終学活中にいなくなりました。私は終学活を中断し、生徒を探しに行き、活動に参加させるようにしました。それから私は、毎日のようにその生徒を追いかけ話をしました。その中で、生徒は次第に自分自身のことを話してくれるようになり、教育実習の総まとめである研究授業では、今まで一度も出席しなかった体育の授業に、体操服を着て待っていてくれました。生徒の気まぐれだったのかもしれませんが、少しでも私の思いが伝わってくれたのではないかと感じました。

この3週間で多くの方に支えていただき、教師の魅力を強く感じました。それと同時に、自分の未熟さもよく分かりました。ただ、教師が本気で関われば、生徒から素直に反応が返ってくるものだということが実感することができました。今後もこの経験を活かし、日々成長していきたいです。

## 公衆衛生看護学実習Ⅱで学んだこと

看護学科 3年 大日向 祐香



私がこの実習で学んだことは、保健師は病気の人だけを対象とするのではなく、健康な人も対象とするということです。

実習を行った阿賀野市では、水中運動教室という事業を実施しており、健康な人がこれからも元気で生活できるような取り組みを行っていました。このような事業を行うことで、健康が維持され、医療費の削減にも繋がります。

病気を持つ人に支援を行うのはもちろんのこと、健康な人が病気にならないための予防を行うことも保健師にとって重要な仕事の一つであることを学びました。

保健師は、様々なライフステージにある人を対象としていること、また、個人だけでなく集団全体にも目を向け、地域全体を見ていくことが大切であることをこの実習を通して学ぶことができました。

## 相談援助実習を終えて

社会福祉学科 3年 成澤 拓朗



私は、五泉市の老人デイサービスセンターで約1ヶ月間実習をさせていただきました。実際の福祉の現場を体験することだけでも貴重な経験となりました。

利用者様の送迎時や独居高齢者宅への訪問調査を行った際には、高齢社会の現状を目の当たりにしました。老々介護をされている高齢者夫婦のお宅では、介護する側が病気になってしまい介護が行えず、生活が成り立たなくなってしまうケースが印象に残っています。

このような体験をさせていただく中で、私は毎日目標をしっかりと立て、高い意識を持って過ごすことができました。特に、「将来どんな社会福祉士になりたいか」を考えながら実習ができたことは、これからの学生生活にも活かすことができると思います。利用者様とのコミュニケーションやカンファレンスへの同席など、生活相談員の業務を実際に体験したことを通して、サービスの中心に利用者様を位置づけ、利用者様を取り巻く環境や背景にも目を向けながらケアの質を高めることのできる「視野の広い社会福祉士」になりたいと思いました。

## 大学の講義だけでは得られない貴重な経験

医療情報管理学科 3年 五十嵐 美咲



私は、今回の実習で「診療情報管理士」、「医療事務」としての業務を経験させていただきました。

電子カルテのデータを見ながらの作業は、初めて患者様の生のデータを扱うということもありとても緊張しましたが、実在するカルテをじっくりと見る機会は今までなかったのとでも勉強になりました。最初は、緊張してばかりで仕事を覚えることに時間がかかってしまいましたが、日が経つにつれ徐々に緊張がやりに変わっていきました。実際に現場で経験しないと分からないことが多くありましたが、講義で学んだ知識をより深めることができ、任される業務に楽しさを感じました。

また、実習を経験させていただく中で、チーム医療の「連携」の大切さを感じ、医療事務の知識だけではチーム医療の一員となるには不十分であり、もっと勉強が必要だと痛感しました。

今回の学外実習を経験して、これから自分が何をすべきか理解することができました。学外実習に参加する機会をいただけたことに感謝します。

# 卒業生レポート

OB&OG FILE

現場の第一線で活躍するOB&OGを紹介します。  
仕事の魅力ややりがい、本学での学びや思い出についてお話を伺いました。



## 20年後30年後も笑顔で暮らしてもらえるように

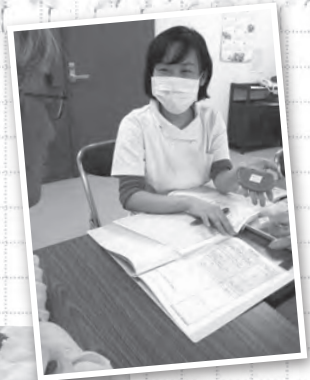
私は現在、佐渡市にある市立病院で管理栄養士として働いています。主な仕事内容は、入院患者様の栄養管理と外来での栄養指導です。「患者様にとって最適な方法」を常に考え、病院スタッフの皆さんと協力して、食事面でのサポートを行っています。病院に勤務して、改めて「病気になる前に予防することの大切さ」を強く感じました。外来の栄養指導で患者様と一緒に考え、患者様が自分に合った食生活を見つけて実行してもらい、20年後30年後もずっと笑顔で元気に暮らしていただくことを目標に、日々研鑽を積み、患者様の健康をつくるお手伝いをしていきたいと思っています。

### 本学を一言で表すとしたら何になりますか？

「学び」・・・社会人になっても大学を訪れば、新しい情報に触れることができ、専門職としての学びの大切さを再確認できます。私は現在、働きながら大学院で学んでいます。職場の方々の理解はもちろんのこと、大学、先生方からの手厚いサポートもあり、佐渡市で仕事を続けながら大学院に通えているのは新潟医療福祉大学だからこそだと思います。

### これから管理栄養士を目指す高校生へメッセージをお願いします。

管理栄養士の仕事は、食を通してたくさんの人の笑顔に出会える幸せな職業だと思います。しかし、やりがいがある分、体力もいる仕事ですので、体を鍛えておくことをお勧めします。夢に向かって頑張ってください!!



佐渡市立相川病院  
【管理栄養士】

矢川 美未子<sup>さん</sup>

新潟県 佐渡高校出身  
健康栄養学科  
平成17年度卒業



## 毎日が勉強です!

私は、新潟リハビリテーション病院併設のメディカルフィットネスで健康運動指導士として働いています。病院併設の施設ということもあり、日々様々な疾患や悩みを抱える方々がいらっしゃいます。私は、利用者の方々の疾患や悩みを少しでも解消して、健康な方が少しでも増えるように、適切な運動処方やアドバイスができるスタッフへと成長したいと思っています。まだまだ苦手な分野もあるので、これからも学びを深めていき、理学療法士やスポーツトレーナーなどの他の職種のスタッフと連携しながら、様々な視点で利用者の方々にアドバイスできるようになることが目標です。

### 本学での学びは、現在の仕事にどのように活かされていますか？

スポーツについて幅広く学べるカリキュラムが配置されており、私はその中でも健康増進について重点的に学び、演習やゼミ活動では、中高齢者の方々を対象に運動教室を行ったことが特に貴重な経験となりました。講義で学んだことや運動指導・教室運営で経験したことなど、今の仕事に大いに活かされています。

### これから健康スポーツ学科を目指す高校生へメッセージをお願いします。

本学科では、健康運動指導士はもちろん、スポーツ・健康・教育に関連する様々な資格を自分の将来に合わせて取得することができます。新しい環境に飛び込む時は必ず不安がつきものですが、自分の夢を達成できるように自分の力を信じて頑張ってください!



医療法人 愛広会  
メディカルフィットネス ロコパーク  
【健康運動指導士】

水越 菜々香<sup>さん</sup>

新潟県 直江津高校出身  
健康スポーツ学科  
平成24年度卒業





## 精神科看護師としてのやりがい

私は、精神科急性期治療病棟に勤務しており、患者様のQOLが向上することを目指して看護を提供しています。精神科急性期治療病棟は、入院される患者様の年齢層が広く、また患者様一人ひとりの疾患、抱く不安やストレスが異なるため、個性のある看護を提供することが難しい場と感じています。しかし、その中で患者様の笑顔や「話を聞いてもらえて良かった」という言葉をいただくこともあり、精神科看護師の仕事にやりがいを感じています。少しずつできる業務も増えてきましたが、さらに良い看護を患者様へ提供できるよう努めていきたいと思えます。

### 本学を一言で表すとしたら何になりますか？

「希望」…医療・福祉を必要とする人々が増加する中、それらを学ぶ場である新潟医療福祉大学は希望だと私は考えます。また、学生が将来への希望を持って学んでいる場でもあり、私自身看護学科の学生として、希望に満ちた4年間を過ごすことができました。

### これから看護師を目指す高校生へメッセージをお願いします。

社会人として勤務するまでは、看護師は大変なイメージをずっと抱いていましたが、実際に働くことで看護師は仕事に幸せを見出せる職業である気がつきました。多くの患者様と関わることができるとてもやりがいのある職業です。ぜひ、希望をもって看護師を目指してください。



医療法人恵生会  
南浜病院  
【看護師】

辰口 翔子さん

新潟県 長岡向陵高校出身  
看護学科  
平成25年度卒業

03

## 地域の人と人を笑顔で繋ぐ

現在、ボランティア・市民活動センターにおいて、地域で活動をしているボランティアの方々の支援を行いながら社協（社会福祉協議会）の窓口で相談業務を行っています。“ボランティアコーディネーター”と堂々と名乗れるよう、まずは地域の方々やボランティアの方々とコミュニケーションを取って繋がりを広げていきたいです。そして、窓口業務の際には、私が「気軽に立ち寄れる社協」のきっかけになれるような対応を心掛けていきたいと思えます。様々な人と関わることが多いため、日々多くの気づきと学びがあり、とても充実しています。笑顔と、どんな相談でも受けとめる思いを大切に、日々の仕事に取り組みます。

### 本学での学びは、現在の仕事にどのように活かされていますか？

大学での講義や事例検討、グループワークや実習を通じて学んだこと全てが現在の基礎になっています。特にグループワークや連携ゼミでの学びはとても大きく、意見を相手に伝えることや自分の考えと違った視点を持つこと、相手の意見を聞き新たな発見と気づきを得た経験は、現在の私にとって大きなプラスになっています。

### これからソーシャルワーカーを目指す高校生へメッセージをお願いします。

福祉の現場は、利用者や家族、地域の方々、同職員・他の職種職員の方々と関わります。相手の意見を受け入れること、自分の意見を伝えること、話しを引き出すことなど、基本的なコミュニケーション能力が重要になりますので、学生時代は、多くの方々と関わり、多方面からの知識や考え方を吸収して欲しいと思えます。



茅野市社会福祉協議会  
【ボランティアコーディネーター】

鈴木 敦子さん

長野県 清泉女学院高校出身  
社会福祉学科  
平成25年度卒業

04

## お客様の笑顔が力です。

私は現在、ルームアドバイザーとして、日々の仕事に励んでおります。営業の難しさを感じる中、力になるのがお客様の笑顔です。以前、お客様に「丁寧に対応してくれて、ありがとう。もしまだ引越しの機会があれば、田村さんにお願ひしたいです。」という嬉しいお言葉をいただきました。新人で不安ながらも、自分のことを伝え、お客様を知っていくことで心に届くものがあると強く感じました。これから多くのお客様と出会う中で、時には迷ったり悩んだりもするかもしれませんが、常により幸せのある暮らし作りのお手伝いをすることを目指して大きく成長していきたいです。

### 本学を一言で表すとしたら何になりますか？

「温か」…学科やサークル活動はもちろん、学業や就職活動の面でも、多くの友人や教職員の方から応援やサポートがあったからこそ、現在こうして幸せを感じられる仕事ができていると思えます。新潟医療福祉大学は、人との繋がりが豊富で、温かみのある大学だと思います。

### これから医療情報管理学科を目指す高校生へメッセージをお願いします。

本学科では、医療やITだけでなく、ビジネススキルや教養を学ぶため、病院、保健・福祉施設から一般企業、公務員まで幅広い分野での活躍を目指すことができます。将来の目標が明確に決まっていない人でも、本学で多くの人との出会い、幅広い学びや経験をする中で、自身の将来を明確に決めることもできますので、ぜひ本学科で学ぶことを目標に勉強に励んでください。



株式会社 リビングギャラリー  
【営業】

田村 菜さん

新潟県 敬和学園高校出身  
医療情報管理学科  
平成25年度卒業



05

# 「第14回新潟医療福祉学会学術集会」 開催報告

新潟医療福祉学会は、本学が設立されると同時に、本学を中心にした新潟県内の健康と医療福祉に関わる職業を専攻されている人たちの研鑽の場として立ち上げられました。また、個々の職能者のみを対象とする学会ではなく、健康と医療と福祉に関連したすべての職種の人たちを対象とした幅広い職能者が集う貴重な機会として、情報交換しながら「チーム医療」を実感できる場にもなっています。

今年度は、10月25日(土)本学キャンパスを会場として、プロジェクト研究センター報告3題、一般演題5題、ポスター発表63題、特別講演およびシンポジウム4題を含め、全部で76題の発表が行われ、発表後には、会頭賞・奨励賞の表彰が行われました。

## テーマ

### 「地域包括ケアシステムの構築と保健・医療・福祉専門職の役割」

## 特別講演

### 新潟市における「地域包括ケアシステム」構築について—医師会の取り組みを中心に—

講師：藤田 一隆（一般社団法人新潟市医師会 会長）

システム構築に向けて新潟市医師会等が取り組んでいる「新潟市医師会在宅診療医ネットワーク」、「在宅医療IT関連事業」、「在宅医療連携拠点事業」について述べるとともに、究極の課題である「看取り」について考える。

## シンポジウム

### 《地域包括ケアシステムの構築と保健・医療・福祉専門職の役割》

#### 「今変わる在宅医療～地域包括ケアシステムを支えるために」

齋藤 忠雄（齋藤内科クリニック 院長）

モデル事業を紹介しながら、新潟市の医療計画ならびに地域包括ケアシステムによる将来を展望する。

#### 「地域包括ケアシステムにおける連携室ソーシャルワーカーの役割」

齋川 克之（済生会新潟第二病院 地域医療連携室 室長）

地域の課題抽出、問題解決のためのコーディネート、様々な社会資源の結びつけなど、システムにおいて複雑多岐な業務を担う病院連携室のソーシャルワーカーの役割について述べる。

#### 「地域包括ケアシステムに病院看護師はどう関わるか」

柏木 夕香（新潟県立がんセンター新潟病院 副看護師長）

システムにおいて、病院看護師が何をどのようにして地域につなげ、また、地域から何を受け取るのか明らかにしていくことにより、看護師の役割を述べる。

#### 「地域包括ケアシステムにおけるリハビリテーション職種の役割」

郷 貴大（公益社団法人新潟県理学療法士会 理事）

システム構築に向けて、リハビリテーション職種が目指す広域で社会性の高い活動について述べるとともに、実現に向けて生じ得る問題点についても取り上げる。



▶午前の部では、本学研究推進機構プロジェクト研究センターの活動報告、一般演題の口演発表およびポスター発表が行われました。



▶午後の特別講演・シンポジウムには、地域包括ケアシステムに関心が高い行政関係者をはじめ、病院・医師会・社会福祉協議会等から、120名を超えるご参加をいただき、新潟における現在の取り組みや目指すべき方向性、生じてくる課題等を共有することができました。

皆さまのご支援とご理解のもと、学内・学外会員95名、非会員124名など、250名以上の方々にご参加をいただき、盛会のうちに今回の学術集会を終えることができました。改めて心よりお礼を申し上げます。

次回の第15回新潟医療福祉学会学術集会は、健康科学部健康栄養学科の齋藤トシ子学科長を大会長として開催される予定です。来年度も多数のご参加をお待ち申し上げます。

## UROP (研究プロジェクト演習) 前期発表会が行われました

NEWS 01

9月10日(水)、本学にてUROP(研究プロジェクト演習)前期発表会が行われました。

UROPとはThe Undergraduate Research Opportunity Programの略で、教員の研究活動へ関わる機会を学部学生に提供し、学生は自身の将来の進路や研究の対象などについて学ぶことができるという自由選択科目です。

UROPを履修する学生は、指導教員の研究を補助すると同時に、自らの立案したプロジェクトを実施します。そして、その成果について専門学会発表の形式にならない、履修期間の最後に公開で発表を行います。

今回参加した学生は19名で、11演題の発表がなされ、発表後は活発な質疑応答が行われました。学生は、研究の作法や学会発表の雰囲気などに触れることができ、その楽しさを知る良い機会となります。履修者は年々増えており、当プログラムがきっかけで、本学大学院への進学を決めた学生もいます。

### 2014年度前期UROP(研究プロジェクト演習)発表会演題

- 中高年者を対象としたアンケート結果から見える怪我や痛みと生活の関わり
- 力のいらぬ介助法に関する力学的考察
- 随意収縮強度が運動誘発電位とCortical Silent Periodに及ぼす影響
- 在宅脳卒中片麻痺者と健康高齢者の座位行動における作業遂行の比較
- 表面筋電図を用いた力のグレーディングと静的筋収縮持続時の筋疲労の検討
- 水泳の腕の運動解析
- 坂道での膝モーメント
- ランディングのバイオメカニクス
- 加速度計データ処理
- ゼロからの3次元動作解析
- 片脚立位の分析



## 学習支援センター&健康栄養学科共同企画「自炊ワークショップ」初開催

NEWS 02

9月22日(月)、学習支援センターと健康栄養学科の共同企画として、「自炊ワークショップ」が初開催されました。

1回目の今回は、健康スポーツ学科の濱野先生にご協力いただき、「スポーツ選手としての自己健康管理は食事管理から」という考えのもと、「目指せ♥女子カアップアスリート!」と題して、毎日の自炊における参加者の調理レパートリーを増やし、栄養バランス、食事アレンジ力を共にアップさせる簡単なコツについて紹介する機会となりました。

参加者である女子バレーボール部員の学生は、17名中16名が一人暮らしで、普段から自炊やお弁当作りなど基本的な調理には慣れている学生なので、今回は【①栄養バランスの基本について理解を深めること】、【②すぐにでも実践できる自炊メニューアレンジ術を知ってもらうこと】を目標とし、ワークショップを進めました。

ワークショップ終了後のアンケートでは、「これからバランスのとれた食事を心がけていきたい」「減量のための食事メニューを学びたい」「もっといろいろな種類の料理を知りたい」などの感想が挙がりました。今回は、バランスの良い食事の理解とその実践法の修得を目標としたため、アンケート結果から学生たちが積極的に内容を吸収してくれたことを確認できました。また、今後の課題としては、今回の方法を実践するにあたって、1食あたりに使用する食材料量についてもより分かりやすく理解できるような内容が必要だと感じました。



## 第24回新潟県スポーツ・レクリエーション大会 参加報告

NEWS 03

10月4日(土)に、阿賀野市内各種施設・水原総合体育館で開催された「第24回新潟県スポーツ・レクリエーション大会」に本学健康スポーツ学科の学生が参加しました。今大会は、「広く県民を対象とした市民参加型大会を開催することを通して、生涯スポーツの振興と地域スポーツ・レクリエーション運動の活性化を図り、県民の健康増進と生きがいの高揚に資すること」を目的としています。

3年次に「レクリエーション・コーディネーター」を取得した健康スポーツ学科の4年生2名はスタッフとして参加し、スポーツの振興と普及活動を実践してきました。また、資格取得を目指す学生は事業実習

として「スポーツテンカの講習会」に参加し、講習会終了後に、早速、子どもたちへの指導実践を行ってきました。

「スポーツテンカ」は、吉本興業の子育て応援プロジェクト「パパパーク」と日本レクリエーション協会が共同で開発したニュースポーツです。講習会や子どもたちへの指導中は、笑顔や歓声が溢れ、参加者全員が「スポーツ・レクリエーション」を楽しみました。講習会、指導実践終了後には、「スポーツテンカ普及員」の認定証をいただきました。



## 『目の愛護デー』に合わせて保育園で「目の講習会」を開催しました

NEWS 04

視機能科学科では、教育を通じて、保健・医療・福祉サービス対象者のQOL(生活の質)の向上並びに地域社会の発展に貢献することを理念としています。

そこで、10月10日(金)の『目の愛護デー』に合わせて、新潟市北區にある新潟市立太田保育園で、幼児を対象とした「目の健康に関する講習会」を実施しました。

幼児期は、視機能の発達過程において一番大切な時期です。そこで、幼児の皆さんに目の健康、目の大切さを理解してもらうために、「正しいテレビの見方」など、具体的な事例について紙芝居を使って説明しました。

講習会終了後、参加した学生からは、「紙芝居の制作は大変でした

が、園児が興味を持ち、かつ楽しそうに聞いてくれたので達成感を得ることができました」「小さな子どもに対して目の大切さを分かりやすく伝えることはとても大変でしたが、貴重な経験になりました」などの感想が挙がりました。



# 伍桃祭を終えて

## 第14回伍桃祭(大学祭)報告

今年の伍桃祭のテーマは、「grow up(成長)」でした。今年4月の視機能科学科新設に伴い、本学は全11学科となり、更なる“成長”を遂げました。また、伍桃祭の準備から開催、運営を通して学生の意識や雰囲気にも変化が現れ、大学全体でより良い大学に“成長”したと感じます。これらのことをふまえると今回の伍桃祭は、テーマに沿って行えた実感しています。

当日は、アーティストの「ケラケラ」を特別ゲストに迎えライブを開催し、来場者の方々が笑顔で帰る姿を見て、大変嬉しく思いました。そのほかに、クラブ・サークルによるパフォーマンス、模擬店など多くのイベントを通して、過去最多の方々に楽しんでいただきました。参加者全員が一体となって盛り上がることで、伍桃祭を楽しく開催できたのではないかと思います。

最後になりましたが、無事に伍桃祭を終えることができたのも、地域の方々のご協賛いただいた企業様をはじめ、教職員の方々や参加してくれた学生の皆さんなど、多くの方々にご協力いただいたおかげです。そして、一緒に企画・運営してくれた学友会・伍桃祭実行委員に感謝します。ありがとうございました。

第14回伍桃祭実行委員長兼学友会副会長 阿部 友弥



# 受験生のみなさんへ

## 春のオープンキャンパス 3月21日(土)

新3・2年生に向けて、「大学・入試概要説明」はもちろん、「施設見学」や「個別相談」「体験プログラム」など様々なプログラムを用意しています。また、保健・医療・福祉・スポーツ分野の仕事内容や資格、養成校の最新情報、大学と専門学校の違いなど、みなさんの進路選択に役立つ情報が満載の「進学総合ガイダンス」など、春のオープンキャンパス限定のプログラムも計画しています。どうぞお気軽にご参加ください。



## 一般入試(前期日程・後期日程)のご案内

- 前期日程では、特待生制度で最大4年間の授業料が全額免除!
- インターネット出願開始。  
1出願につき3,000円割引!
- 「第2志願制度」の活用により、一度の出願で第2希望学科まで受験可能。  
※前期日程では、「理学療法学科」「臨床技術学科」「看護学科」を第2志願とすることはできません  
※後期日程では、「理学療法学科」「臨床技術学科」「看護学科」「医療情報管理学科」を第2志願とすることはできません
- 前期日程では全国8都市、後期日程では全国5都市に試験会場を設置。  
(前期日程:新潟・東京・郡山・高崎・長野・富山・鶴岡・仙台)  
(後期日程:新潟・東京・郡山・長野・鶴岡)
- センター試験利用入試との「併願」が可能。
- 後期日程では、英語・国語の「2科目」で受験可能。

### ■募集人員

学 科	前期日程	後期日程
理学療法学科	28名	10名
作業療法学科	14名	2名
言語聴覚学科	17名	2名
義肢装具自立支援学科	13名	2名
臨床技術学科	39名	4名
視機能科学科	15名	2名
健康栄養学科	15名	2名
健康スポーツ学科	45名	5名
看護学科	40名	2名
社会福祉学科	35名	3名
医療情報管理学科	20名	2名
計	281名	36名

### ■入学選考試験日程

試験区分	出願期間	試験日
前期日程	1/7(水)~1/21(水) [消印有効]	2/4(水)
後期日程	2/10(火)~2/23(月) [消印有効]	3/6(金)

※東日本大震災、長野県北部地震、福島第一原子力発電所事故により被災された方へ  
平成27年度入学選考試験において【入学検定料免除】及び【授業料減免】の被災者修学支援措置を講じております。詳細につきましては、入試事務室(TEL:025-257-4459)までお問い合わせください。



新潟医療福祉大学

〒950-3198 新潟市北区島見町1398番地  
TEL 025-257-4455(代) FAX 025-257-4456  
URL <http://www.nuhw.ac.jp/>  
携帯サイト <http://www.nuhw.ac.jp/m/>  
【入試事務室】TEL 025-257-4459  
E-mail [nyuusi@nuhw.ac.jp](mailto:nyuusi@nuhw.ac.jp)

誌名「QOLサポーター新潟」の由来

世界一の長寿国となった我が国では、「いのちの長さ」を伸ばすことと同様に、「生活の質、Quality of Life, QOL」を豊かにすることが、益々重要になっていきます。新潟医療福祉大学では障害者、高齢者などのQOLを高くすることを支援する(サポート)人材を育成します。このような人材を「QOLサポーター」と名づけました。そして皆様へ本学の内容、活動をお知らせする広報誌を「QOLサポーター新潟」としました。

